



令和4年度 市内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

加賀立国 1200年プレ企画 特別講演会

武器から探る 南加賀の古墳時代

田中 晋作 氏



小松市八里向山F古墳群全景（左）と八里向山F7号墳第1主体部の副葬品出土状況（右）

令和4年9月3日(土) 13:30～15:30

会場：こまつ芸術劇場うらら小ホール

(石川県小松市土居原町710)



Komatsu City Archaeological Research Center

石川県小松市原町77-8 電話 (0761)47-5713 e-mail:maibun@city.komatsu.lg.jp

講師プロフィール

田中 晋作 たなか しんさく

略 歴：

1955年 大阪府生まれ

1987年 関西大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程
単位取得退学

2012年3月 池田市教育委員会教育部次長兼池田市立歴史民俗館館長退職

2012年4月～2021年3月 山口大学人文学部教授

著 書：

『百舌鳥・古市古墳群の研究』2001 学生社

『筒形銅器と政権交替』2009 学生社

「古墳時代の「漆黒の軍団」」『北陸から見た日本史』2015 洋泉社

『古市古墳群の解明へ 盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』2016 新泉社

現 職：山口大学人文学部 客員教授

武器から探る南加賀の古墳時代

山口大学客員教授 田中 晋作

はじめに

古墳時代に入り、有力古墳の副葬品が鏡（玉類）+ 武器 + 鉄製生産用具を基本にして構成されるようになります。権力や支配の正当性を示す象徴：鏡（玉類）、これを保障、担保する武力：武器、これらを支える生産：鉄製生産用具を膝下におさめた首長の姿を写し出しているのでしょうか。

奈良県天理市黒塚古墳や京都府木津川市椿井大塚山古墳などといった古墳出現期（3世紀後半）の一部有力古墳では、この段階ですでに刀や剣、ヤリ、銅鏃や鉄鏃などの武器が整うとともに、被葬者個人が使用する杵を越えた量の副葬がはじまっています。このことは、権力や支配の実効性を保障、担保するうえで、武器：武力がきわめて重要な役割を果たしていたことを物語っています。

さらに、中期（5世紀）には帯金式甲冑が加わり、攻撃用武器の主体を占める刀剣や鉄鏃などの副葬量は、社会基盤を支える各種鉄製生産用具のそれをはるかに上回り急速に拡大します。古墳時代は、貴重な鉄素材を各種生産用具に優先して、武器の製造に費やしなければならない社会へと移行していったようです。長期間にわたって、武力、あるいは軍事をもって解決を必要とする政治的課題に直面していたことがその背景にあったものと考えられます。

このことは、前期後半（369年）、奈良県天理市石上神宮に伝えられてきた、百済地域の政権勢力から日本列島の政権勢力へ贈られた七支刀、また中期の埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣や熊本県和水町江田船山古墳出土銀錯銘大刀などにみられるように、文字による政権勢力間との関係や、政権勢力と地域勢力との関係を確認する記録が刀剣を介して行われており、当時の社会にあって武器：武力がもった存在意義の大きさを裏付けています。

ところで、実用武器は、よりすぐれた機能をもつ武器が生み出されると、古くなった武器から順次廃棄、更新されていく運命にあります。戦国時代、明治維新、さらに第二次世界大戦のことを思い浮かべてください、想像を絶する量の武器が製造されながら、よほど特殊な事情がない限り、後世にまでその姿をとどめることはありません。

その中にあって、当時の武器が高い比率で現代にまで残されている時代が古墳時代です。意外に思われるかもしれませんが、これは古墳時代がさまざまな器物を古墳に副葬するという、きわめて特殊な習慣をもった時代であったからです。考古学が古墳時代の武器や軍事に関する研究で、大きな成果をあげてきた理由がここにあります。

また、実用武器には時代を越え、地域を越えて適用することができるいくつかの法則があります。

- ・各時代における最新の技術は、まず武器に採用される。
- ・攻撃用武器と防御用武器の発達は、表裏一体の関係にある。
- ・最新の機能を備えた武器には自由な流通がない。
- ・武器の生産量と発達の速度は、その時代の社会情勢を反映する。
- ・武装の内容や軍事組織の編制は、軍事行動によって解決されなければならない課題によって決定される。

などです。

今回のお話では、私の考える、のちに畿内^{きない}と呼ばれるようになる地域に所在した中期の政権勢力（大阪府^も百舌鳥^ず・古市古墳群^{ふるいち}の勢力）と南加賀地域を中心に北陸地方に所在した諸勢力との関係、また朝鮮半島を舞台に展開する政治的、軍事的情勢について、帯金式甲冑を手がかりにして、上記の法則をキーワードとして織り込みながら紹介したいと思います。

なお、以下では、古墳時代の政権勢力を、畿内に所在した複数の有力な勢力によって構成された政治体とすることから畿内政権と呼ぶことにします。

1. 古墳時代の政権勢力とこれを武力をもって支えた諸勢力の推移—百舌鳥・古市古墳群の勢力が占める位置—

武力は、政治権力の行使を保障、担保する手段であって、これを運用する政治権力に連動してそのあり方が変化すると考えています。まず、古墳時代の政権勢力の動静と武力：武器の推移とを照合することからはじめてみたいと思います。

古墳時代の政権勢力についてはさまざまな考えが提示されていますが、私は大和盆地^{やまと}東南部地域に興った有力勢力が古墳時代をとおして安定した成長を遂げていくのではなく、複数の有力な勢力の間で政権内の主導権をめぐる確執があったとの立場をとっています。すなわち、広義の奈良県大和古墳群を中心にした大和盆地東南部地域の勢力→奈良市^{さき}佐紀古墳群の勢力→大阪府百舌鳥・古市古墳群の勢力→大阪府高槻市^{いましろづか}今城塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力→奈良県大和盆地南部地域の勢力へと、政権内の主導権が時間的な重複をもって移動したと考えています。

また、それぞれの勢力が政権を担った段階を指標にして、大和盆地東南部地域の勢力：前期前半・半ば、佐紀古墳群の勢力：前期後半、百舌鳥・古市古墳群の勢力：中期（前半・半ば・後半）、今城塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力：後期前半、大和盆地南部地域の勢力：後期後半に区分しています。

① 武器の大量副葬のはじまりと勢力間の格差の顕在化（前期前半・半ば）

前期前半、政権勢力として台頭した大和盆地東南部地域の勢力と、これに連なる有力勢力のもとで、刀・剣・ヤリ・鉾^{ほこ}・鉄鏃^こ・銅鏃^ご・小札革綴冑^{かねかわとじかぶと}などといった多様な武器が出現します。このことは、時代を画する大きな変化です。とくに、当該期にみられる小札革綴冑や素環頭大刀^{そかんとう}については、これを中国からもたらされた威信財的な性格を兼ね備えた武器とする考えがあり、その出土古墳である黒塚古墳（刀 17・剣 3・ヤリ 14・鉄鏃 280+）や椿井大塚山古墳（刀 7+・剣 12+・ヤリ 7+・銅鏃 14+・鉄鏃約 200）、神戸市西求女塚古墳（刀 2・剣 34・ヤリ 12）などでは、冒頭に示したように、すでに被葬者個人が使用する枠を越えた量の副葬がはじまっています。

当該期の大阪府高槻市^{あまみみやま}安満宮山古墳（刀 1）や奈良県大和郡山市^{こいずみおおつか}小泉大塚古墳（剣 1）などと比較するまでもなく、武器の所有にみられる格差は、大和盆地東南部地域の勢力がその台頭に際して、武力がきわめて重要な役割を果たしたことを示しています。さらに、前期半ばの奈良県桜井市メスリ山古墳副室から出土した剣 212 本に象徴されるように、政権を維持していくうえで他の勢力を^{りょうが}凌駕する武器の集積が継続して求められていたことがうかがえます。

② 組成として整った武器の出現（前期後半）

前期後半、畿内政権の主導権は、大和盆地北部の佐紀古墳群を中心にした勢力へと移動します。この時期を境にして、武器のあり方にも変化がみられます。

佐紀古墳群では、大型前方後円墳（大型主墳）での武器の内容は知られていませんが、猫塚古墳^{ねこづか}やマエ塚古墳^{まゑづか}、丸塚古墳といった中小規模古墳（中・小型主墳）で多くの武器が出土しています。たとえば、中型主墳：マエ塚古墳では、盗掘を受けていたにもかかわらず、刀 8、剣なし

ヤリ 119+ という多量の武器が残されていました。メスリ山古墳と同様に、特定の武器に偏ったものですが、佐紀古墳群に準じる有力古墳群で出土する武器がきわめて限られていたことからすると、政権勢力と各勢力間に刀剣やヤリを中心に、武器の所有にみられる格差が急速に拡大していたことがわかります。政権の主導権を握った佐紀古墳群の勢力が、その優越性によって大和盆地東南部地域の勢力以上に大きな影響力をもつようになったことが考えられます。

一方、前期半ば、日本列島ではじめての鉄製短甲：^{たんこう たてはぎいたかわとじ} 豎矧板革綴短甲が大阪府茨木市紫金山古墳（刀 37・短刀 4・剣 33（ヤリを含む）・

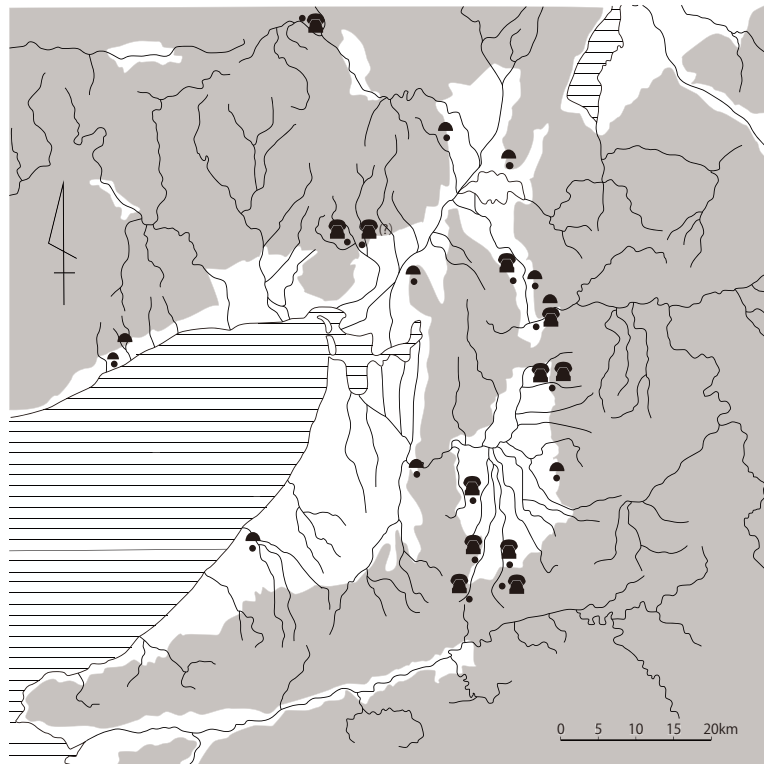


図1 前期甲冑出土古墳分布図（▲：小札革綴冑 ■：短甲）

^{ほうけいいた} 鉄鏃 165) で出土し、前期後半には方形板革綴短甲が現れます。方形板革綴短甲は、日本列島では 19 古墳 20 出土しており、その分布は畿内およびその周辺地域を中心に、日本列島各地に一定の広がりをもつようになります。

とくに、畿内でみられる方形板革綴短甲出土古墳では、佐紀古墳群でみられたような特定の武器に偏った多量副葬とは異なり、手に持って使用する：刀や剣、^{ながえ} 長柄の武器：ヤリや鉾、弓矢：銅鏃や鉄鏃、なかには盾を含む組成として整った武器が副葬されています。このような武器組成の出現の背景には、それまで想定されてこなかった政治的課題への対処があったものと考えられます。

また、図1に示したように、前期後半に併存する小札革綴冑と方形板革綴短甲は、京都府木津川市瓦谷1号墳を除いてセットとして所持されることがありません。このような武装装備の違いは、前者が大和盆地東南部地域の勢力を、後者が佐紀古墳群の勢力をと、それぞれが武力で支える政権勢力が異なっていたことによって生じた現象だと考えています。

③ 装備が標準化された軍事組織の成立（中期）

百舌鳥・古市古墳群の勢力へ畿内政権の主導権が移動する中期に入ると、長刀の一般化、鉾や盾の増加、鉄鏃の大型化、そして帯金式甲冑の出現と、それまでの武器と一線を画する大きな変化がみられます。また、武器の副葬、埋納量も両古墳群を中心に飛躍的に高まります。^{よろい} 甲については、中期半ばに機能的にすぐれた挂甲が導入されますが、中期をとおして帯金式甲冑が防御用武器の中心的な位置を占めています。

ところで、中期に入って出現する帯金式甲冑は、百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで一元的に開発、生産され、その意図によって供給されたと考えられています。とくに、中期の武器は、攻撃用武器と防御用武器が表裏一体の関係をもって推移しており、実用武器としての機能がそれまで以上に高まっていたことがわかります。

また、中期でみられる甲冑の受給関係は、たとえば畿内およびその周辺地域という限られた範囲にあっても一様ではなく、きわめて高い偏在性が認められます。このような現象は、甲冑の受

給が百舌鳥・古市古墳群の勢力による政治的、軍事的判断によって行われていたことを示すもので、とくに両古墳群の勢力が政権内の主導権を確立する中期半ば以降、武器の運用が特定の勢力を中心にして担われるようになっていたと考えられます。さらに、甲冑を中心にした武装装備の標準化は、統一された武器による軍事組織の編制を可能にする基盤が整えられていたことを示すきわめて重要な現象でもあります。

ところで、中期の帯金式甲冑の出土数は、全国で約 600 例にも達し、方形板革綴短甲を主体にした前期後半の鉄製短甲出土数に比べ飛躍的に増加しています。しか

し、前期後半に佐紀古墳群の勢力のもとで台頭した、方形板革綴短甲を含む組成として整った武器をもつ新興中小勢力の後継は、一部例外を除いて、継続して帯金式甲冑が供給される対象になっていません。つまり、方形板革綴短甲をもった前期後半の新興中小勢力の多くは、中期に継続することなく断絶しているのです。

④ 武装装備の一新（後期前半）

後期前半、百舌鳥・古市古墳群の勢力に替わって、男大迹大王（継体天皇）が葬られた古墳と考られている、今城塚古墳を中心にした淀川水系と猪名川流域の勢力が台頭します。この変化と軌を一にするように、それまで主体を占めてきた帯金式甲冑が挂甲に置き換わるという、防御用装備の刷新が図られます。挂甲の構造については、中期の段階と大きな変化がみられないのですが、帯金式甲冑の消滅はまさに劇的な変化です。機能的に優れた挂甲による装備の統一は、戦力整備という点からすると革新的な意味をもちますが、一方でそれまで備蓄されていた帯金式甲冑が廃棄、更新されるといふきわめて大きな社会的代償をとまうことでもあります。

また、後期前半の挂甲出土古墳の分布は、中期の帯金式甲冑出土古墳の分布と重りません。このような現象が生じた要因は、百舌鳥・古市古墳群の勢力の後退と連動して、帯金式甲冑の副葬が顕著にみられた中期の新興中型古墳群や一部の初期群集墳で古墳の築造が停止することにあります。これに対して、挂甲出土古墳は、今城塚古墳のもとで台頭する地域の有力首長墳が主体を占め、出土古墳数と複数副葬事例の減少により挂甲の出土量自体は大きく減少します。

このことは、百舌鳥・古市古墳群の勢力を武力をもって支えた、多くが帯金式甲冑を装備した諸勢力が、今城塚古墳を中心にした勢力のもとでも引き続きその役割を担うのではなく、前期後半から中期への移行段階でみられたと同様に、後期前半の段階で刷新された装備をもつ新たな勢力によってその役割が取ってかわられたことで生じた現象であると考えています。このような現象は、今城塚古墳を中心にした勢力が、大きな社会的代償を伴う防御用装備の刷新を断行できる力をもっていたことを示すとともに、これを必要とした政治的、軍事的課題に直面していたことが想定されます。

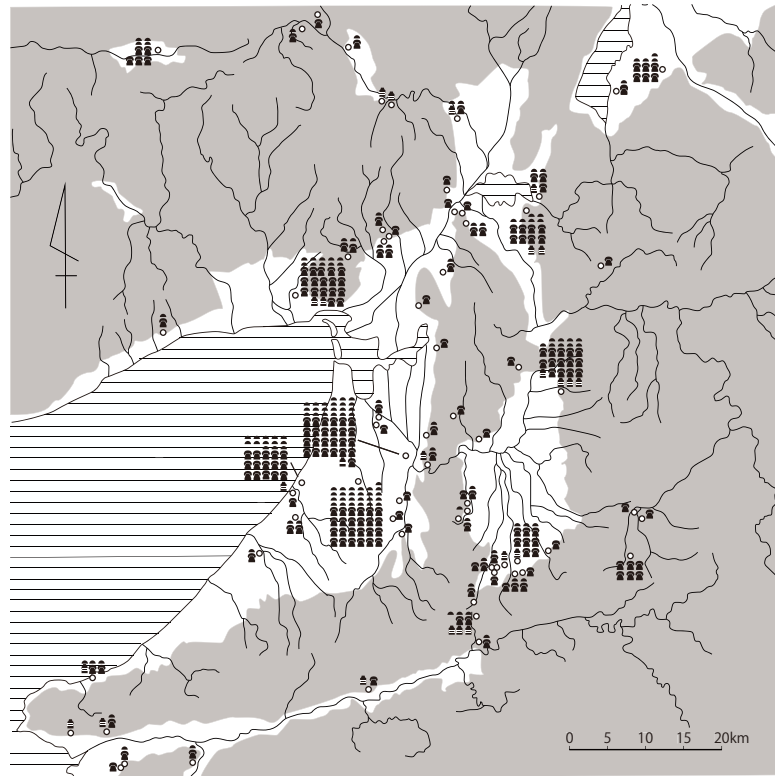


図2 中期甲冑出土古墳分布図（▲：冑 ◻：短甲 ○：挂甲）

以上のことから、古墳時代の畿内およびその周辺地域では、政権勢力を武力をもって支えた勢力は、古墳時代をとおして継続してその任を担うのではなく、それぞれの段階で政権勢力の座にあった勢力との関係によって推移していたことがみてとれます。つまり、畿内政権内での主導権の交替に連動して、これを武力をもって支えた諸勢力も交替していったと考えられます。

2. 大量の武器を必要とした時代

つぎに、現時点で判明しているという条件のもとではありませんが、百舌鳥・古市古墳群の武器の推移について、帯金式甲冑を中心にしてみたいと思います。

ところで、帯金式甲冑、聞きなれない言葉だと思いますが、これは带状の細長い鉄板でフレームを作り、その間に三角形や長方形の鉄板を組み込み、革ひもや釘でとじ合わせて製造された甲冑のことをいいます。また、時代が新しくなるにつれ、使用される鉄板が小さなものから大きなものへ、革ひもでとじたものから釘でとじたものへ、さらに使用される釘が小型のものから大型のものへといった、機能向上を目指した改良が短期間のうちに繰り返し加えられていきます。

これは、古墳時代の武器が、当時の知識や技術の粋を結集して製造されていたことを示しています。同時に、武器は誰でもがどこでも製造できるものではなく、優れた知識や技術をもつ集団

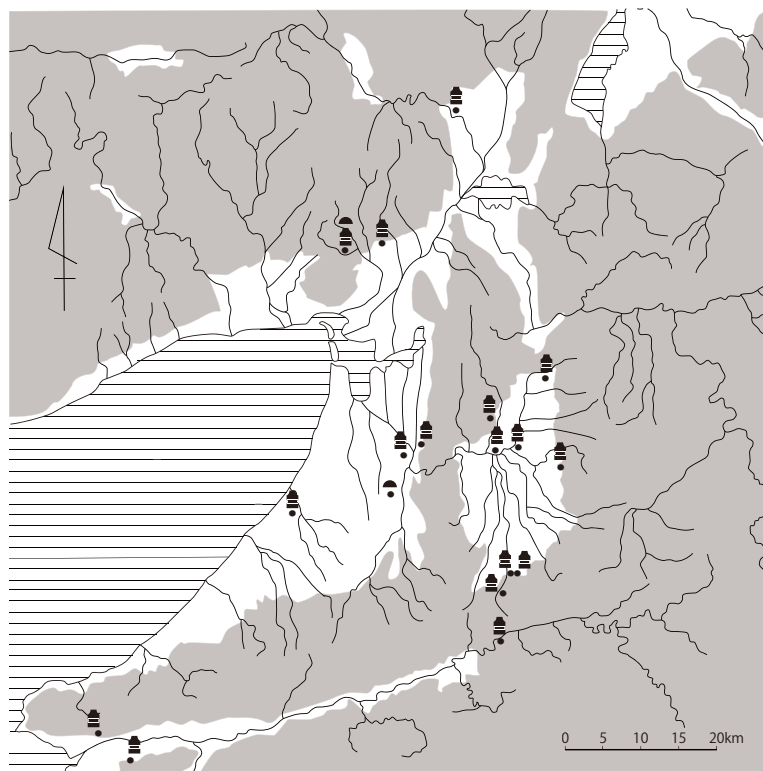


図3 後期前半甲冑出土古墳分布図 (▲: 冑 ■: 挂甲)



図4 復元帯金式甲冑

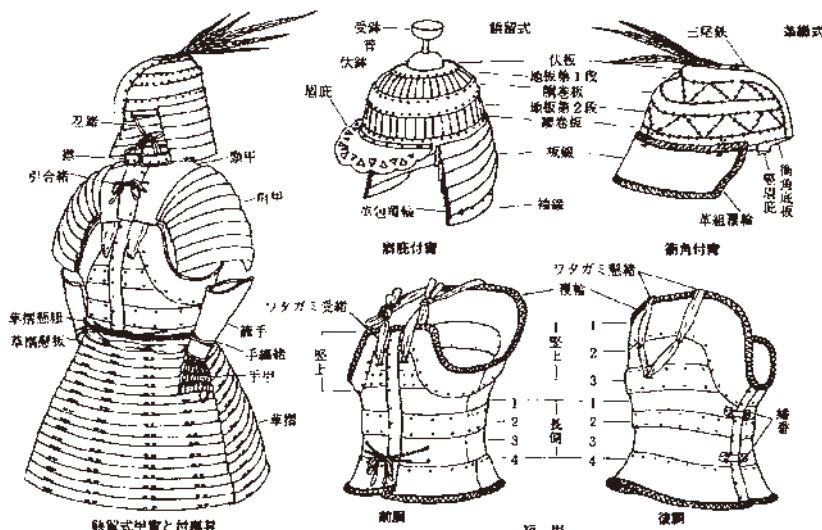


図5 帯金式甲冑模式図

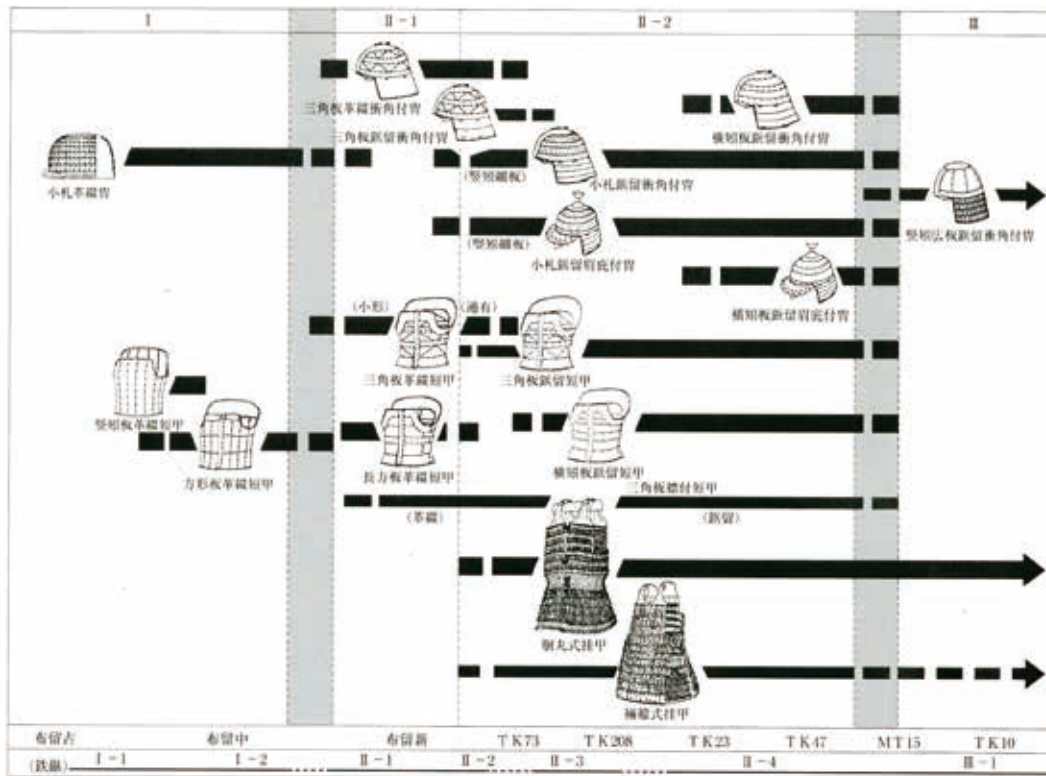


図6 古墳時代甲冑変遷図

だけが独占的に製造できるものであるということも意味しています。上述したように、中期の政権勢力である百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、帯金式甲冑が一元的に製造され、その意図によって各地の勢力に供給されるようになるわけです。ここに、「各時代における最新の技術は、まず武器に採用される」という法則が機能していたことがわかります。

さて、古市古墳群では、古墳群形成の端緒となった大型主墳：津堂城山古墳で、すでに短甲1の副葬が確認できます。中期前半では、古市古墳群では中型主墳：盾塚古墳で冑1・短甲2の副葬がみられます。また、一方の百舌鳥古墳群では中型主墳：百舌鳥大塚山古墳で冑3・短甲6以上と、この段階で早くも甲冑の多量副葬、埋納もはじまります。

中期半ばになると、古市古墳群では新たに小型主墳：珠金塚古墳南榎：冑3・短甲4、同北榎：短甲1や藤の森古墳で短甲1の副葬がみられるようになります。また、墓山古墳の陪塚：野中古墳では、両古墳群でもっとも多い冑11・短甲11が出土しています。百舌鳥古墳群では、日本列島最大の前方後円墳である大山古墳の前方部竪穴式石室で、金銅製（金メッキ）の冑1・短甲1の存在が知られています。

さらに、中期後半では、古市古墳群では中（小？）型主墳：誉田丸山古墳で短甲1、市野山古墳の陪塚である長持山古墳で冑1・短甲1・挂甲1、同じく唐櫃山古墳では冑4・短甲2が出土しています。百舌鳥古墳群では中型主墳：城ノ山古墳で冑2・短甲2・挂甲1がみられます。

このように、百舌鳥・古市古墳群における甲冑の副葬、埋納は、その形成段階から大型主墳と中型主墳ではじまります。中期半ばには陪塚や小型主墳もその対象になり、両古墳群では、時期が下るにしたがってより下位の古墳にも甲冑の副葬が拡大するとともに、大型主墳の陪塚に大量の甲冑が集中し、政権勢力内における格差が顕在化します。同時に、両古墳群での総体としての甲冑出土量が飛躍的に高まり、他の諸勢力との間に懸隔の差が生まれることとなります。

一方で、このような甲冑の副葬、埋納にみられた推移は、刀剣や鉄鏃といった攻撃用武器についても、大型主墳の陪塚を中心に同様のことが起こっています。

たとえば、中期半ばの誉田御廟山古墳の陪塚：アリ山古墳では刀77+・剣8+、野中古墳では刀



図7 百舌鳥古墳群



図8 古市古墳群

154・剣 16+、また鉄鏃は、野中古墳で約 740、アリ山古墳では 1612 となっています。とくに、刀剣や鉄鏃を中心とした攻撃用武器のあり方は、甲冑以上にその実態を写し出しているといえそうです。

また、古市古墳群の主要古墳で出土した刀剣の大きさをみてみると、刀では、最小値は中期前半の高塚山古墳^{たかづかやま}で 66.5 釐、最大値は中期半ばのアリ山古墳の 103.3 釐となっています。一方の剣は、最小値が中期半ばの野中古墳で 64 釐、最大値は珠金塚古墳北櫛の 84.1 釐です。一定量以上の刀剣がみられる古墳では、あくまでも全体的な傾向としてですが、個体間に、刀では、おおよそ 20 釐前後の開きが、剣では 40 釐前後、60 釐前後、さらに 80 釐前後を越えるといった複数の区分がみられます。

このように、古市古墳群で出土している刀剣は、現代的な視点でみる規格からは外れていますが、

表1 古市古墳群出土刀剣の比率及び全長平均

古墳名	出土数		剣/刀 × 100	全長平均値 (釐)	
	刀	剣		刀	剣
野中古墳	153	16	10.5	87.4	64
鞍塚古墳	4	2	50	73.85	67.7
盾塚古墳後円部	10	10	100	88.6	70.9
高塚山古墳	7	7	100	66.5	71.5
アリ山古墳	77	8	10.4	103.3	74.4
珠金塚古墳南櫛	10	7	70	86.2	77.3
珠金塚古墳北櫛	4	1	25	96.3	84.1
盾塚古墳前方部	40	15	37.5	—	—

が、刀については、これが両古墳群の勢力のもとで採られた規格のあり方であったと考えられます。一方の剣については、複数の規格が存在していたようです。とくに刀では、中期前半でみられた個体間の格差が、中期半ばには長さが大きくなり、かつその格差が縮小していることが注目されます。このことは、中期半ば以降に、一定の規格のもとに大量の刀剣が、鉄鏃などを含めて製造される体制が確立していたことが考えられます。あわせて、中期の社会が前期のそれにまして、大量の武器を必要とし、急速な機能向上が求められたことを示しています。

このような現象は、「攻撃用武器と防御

用武器の発達は、表裏一体の関係にある」という法則があてはまります。さらに、「武器の生産量と発達の速度は、その時代の社会情勢を反映する」という法則を当てはめることによって、中期の社会が、前期のそれに比べ高い緊張状態にあったことを導き出すことができます。

3. 百舌鳥・古市古墳群の勢力を支えた中期新興中規模古墳群と初期群集墳

古墳時代中期には、百舌鳥・古市古墳群での武器の副葬、埋納に連動するように、武器の副葬に特化した中規模古墳群や一部の初期群集墳が出現します。このような勢力の出現は、北陸地方の甲冑出土古墳のあり方をみる上で、きわめて有用な手がかりになると考えています。ここでは、その代表的な事例として、大阪府豊中市^{さくらづか}桜塚古墳群東群と奈良県宇陀市^{うしろで}後出古墳群を取り上げて紹介しておきたいと思えます。

① 中期新興中規模古墳群の出現

中期前半、猪名川流域左岸地域に成立した桜塚古墳群東群は、甲冑を中心にした組成として整った武器の副葬によって知られ、ほぼ中期のうちに終焉を迎えています。その首長墳は、径56[㍍]の円墳：大塚古墳→全長55[㍍]の前方後円墳：御獅子塚古墳→全長30～35[㍍]の前方後円墳：北天平塚古墳→径20[㍍]の円墳：南天平塚古墳へと、時期が新しくなるにしたがって規模が縮小していくとともに、墳形が変化します。しかし、いずれの首長墳でも格差をもつふたつの埋葬施設が共通して設けられ、複数の甲冑を含む重厚な武器をもち、これに加えて御獅子塚古墳以降は馬具が伴っています。

また、各埋葬施設から出土した副葬品の構成は、時期を追うごとに武器の占める比率が高まる一方で、各種生産への関与を象徴する農工具をはじめ他の副葬品が減少し、武器に特化していく過程がみてとれます。とくに、中期後半の北天平塚古墳や南天平塚古墳の武器組成は、後述する移動や駐留に対応できる農工具が組み込まれたものになっていたと考えられます。

さらに、中期半ば以降、御獅子塚古墳第1主体部・同第2主体部、北天平塚古墳下層埋葬施設や南天平塚古墳1号棺^{もつかん}で、木棺に朝鮮半島東南部地域でみられる鋌や釘の使用が認められます。



図9 桜塚古墳群東群分布図

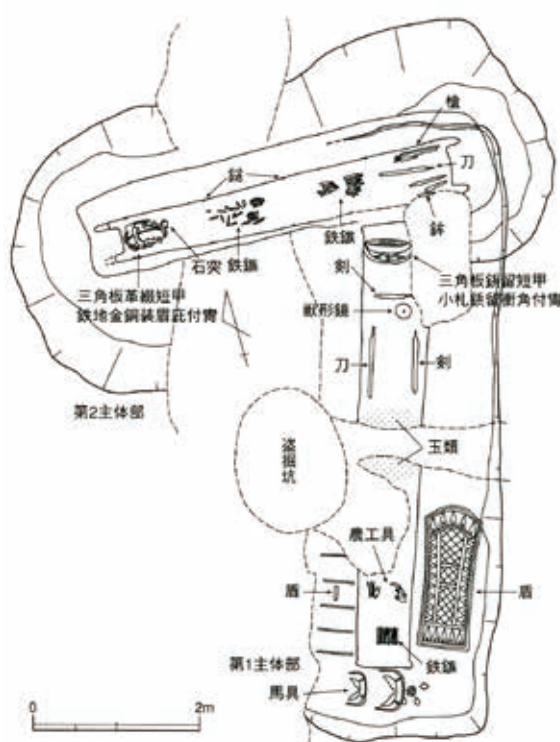


図10 御獅子塚古墳埋葬施設実測図

表2 桜塚古墳群東群出土資料一覧（狐塚古墳については首長墓として扱えるかは不明）

古墳名	墳形	規模(m)	主体部	冑	甲	刀	剣	ヤリ	鉾	鉄鍬	弓	盾	馬具	鋤	手鎌	鎌	斧	鑿	鉈	錐	刀子	鏡	その他		
大塚	円墳	56	西槨	1+	1+	3	2+	-	-	37+	2	2	-	13+	7	21+	10	22	2	20+	-	-			
			東槨	2	3	10	8	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	鏡・櫛	
御獅子塚	前方後円墳	55	第1主体	1	1	1	2	-	-	39	-	2	●	1	4+	3	10	-	-	3	12	鏡・玉			
			第2主体	1	1	1	-	3	4	184	-	●?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10+	-		
北天平塚	前方後円墳	30~35	上層	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	-		
			下層	2	5	3	-	-	2	●	-	5	●	-	-	-	-	-	-	●	-	●	●	-	
南天平塚	円墳	約20	第1棺	-	1	3	●	1	-	●	3	-	●	不明										●	鏡・三環 鈴・櫛
			第2棺	1	2	1	2	-	1	●	●	●	●	不明										●?	鏡
*狐塚	不明	不明	西側	1	1	●	●	-	●	●	-	2	●	1	-	2	2	-	●	-	-	不明	-		
			東側	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	鏡	

本古墳群でみられる武器に特化した副葬品構成は、鏡や釘の使用を介在させることによって、半島東南部地域の勢力と軍事的な関係を継続してもらっていたことによって現出した現象であるといえそうです。

複数の甲冑の継続した副葬からわかるように、中期をとおして百舌鳥・古市古墳群の勢力と強い関係を維持した桜塚古墳群東群の勢力は、地域勢力の首長としての地位をもちながら、一方で、両古墳群の勢力のもとで、軍事上重要な役割を担っていたことが考えられます。とくに、格差をもつふたつの埋葬施設については、熊谷公男氏が冒頭に示した埼玉稲荷山古墳を取り上げて、想像ですがという断りを入れた上で、主たる埋葬施設の被葬者を兄、鉄剣が出土した埋葬施設の被葬者を弟とし、兄が地域首長、弟が政権勢力のもとへ上番（出仕）した杖刀人の「首：かしら」とする想定が注目されます。被葬者間の親族関係にまで踏み込むことができる根拠はありませんが、きわめて興味深い想定です。このような中期新興中規模古墳群は、他にも奈良市帯解古墳群や奈良県五條市近内古墳群、また滋賀県栗東市安養寺古墳群などをあげることができ、同様に百舌鳥・古市古墳群の勢力を武力をもって支えた勢力であったと考えられます。

このことは、「最新の機能を備えた武器には自由な流通がない」という法則を当てはめることによってよりよく理解することができます。つまり、甲冑の供給対象となった勢力は、百舌鳥・古市古墳群の勢力にとって政治や軍事、またこれに関連する交通や交易、さらには生産などといった点で重要な役割を果たしていた、あるいは果たすことが期待されていた勢力であったと考えられます。

② 農工具が組み込まれた武器組成をもつ初期群集墳

一方で、中期半ば以降、後出古墳群のように短甲を中心にした武器の副葬に特化した初期群集墳が出現します。ここで注目するのは、2号墳と3号墳第1主体部でみられる武器と農工具の特異な出土状況です。2号墳では、棺外南西小口におかれた短甲内に、鉾2・鉄鍬1とともに大小の鉄斧各1・鎌1・鉈1・鑿1・鉄斧2がおさめられていました。同様の出土状況が3号墳第1主体でもみられ、短甲内から鉄鍬とともに鎌1と刀子1が出土しています。また、短甲をもつ古墳でみられる刀剣についても、中期半ば以降の古市古墳群でみられるそれに匹敵するものになっています。短甲を装備する被葬者の刀剣についても、当時の古市古墳群に準じていた可能性が考えられます。

このような副葬品の構成と出土状況については、時期が大きく下りますが、奈良時代の養老律

りょうぐんぼうりょうびじゅうぐのじょう

令軍防令備戎具条に規定された律令軍の武装装備につうじるものがあるとする指摘があります。律令軍については、これを侵略的軍隊：攻撃を目的として編制された軍事組織として理解されています。つまり、後出古墳群でみられるような武器の中に組み込まれた少量の農工具は、遠距離、長期間の移動や駐留に対応するためのものであったと考えられるわけです。中期半ばあるいは後半に出現する一部の初期群集墳の被葬者たちは、当初からこのような政治的、軍事的課題への対応を目的とした軍事構成員として生まれてきた勢力であった可能性を考えています。このような武器組成の変化は、「武装の内容や軍事組織の編制は、軍事行動によって解決されなければならない課題によって決定される」という法則から説明することができます。

以上のように、百舌鳥・古市古墳群の勢力がもつ武力は、両古墳群のみによって構成されるのではなく、その膝下に中期新興中規模古墳群や武器の副葬に特化した一部の初期群集墳の勢力が組み込まれた重層的な構造になっていたことが考えられます。また、この背景には、後述するように、朝鮮半島を対象にした、計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動の発動への対応が想定されていたと考えています。

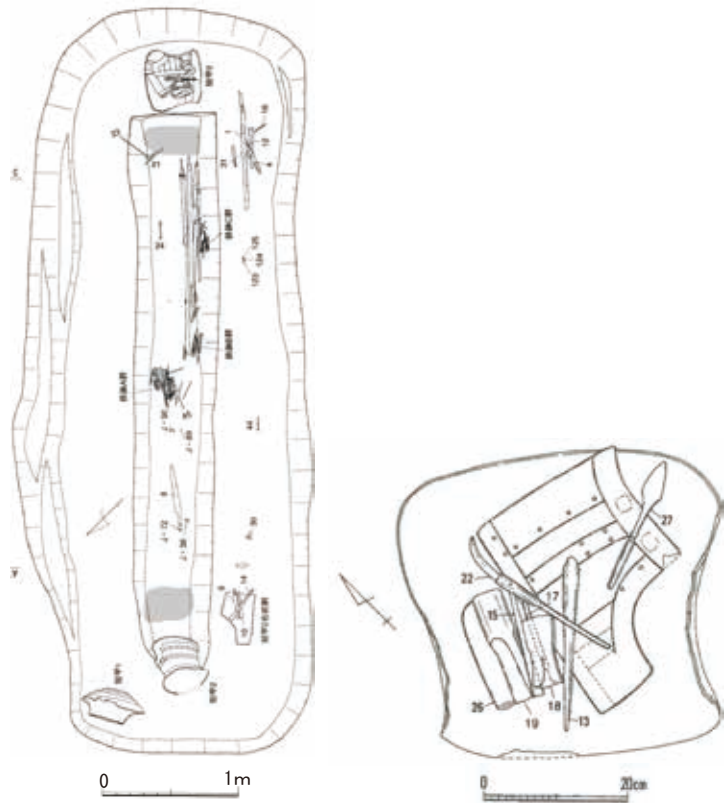


図 11 後出古墳群 2 号墳遺物出土状況および短甲内遺物

凡兵士。每火。紺布幕一口。着裏。銅盆。小釜。隨得二口。鍬一具。剉碓一具。斧一具。小斧一具。鑿一具。鎌二張。鉗一具。每五十人。火鑽一具。熟苧一斤。手鋸一具。每人。弓一張。弓弦袋一口。副弦二條。征箭五十隻。胡籛一具。大刀一口。刀子一枚。礪石一枚。藺帽一枚。飯袋一口。水甬一口。鹽甬一口。脛巾一具。鞋一兩。皆令自備。不可闕少。行軍之日。自盡將去。若上番年。唯將人別戎具。自外不須。

【養老律令軍防令備戎具条】

4. 北陸地方に出現した「漆黒の軍団」

長くなってしまいましたが、以上の内容を踏まえ、本日の主題である南加賀地域を中心にした北陸地方について、私の考えるところを述べてみたいと思います。

まず、これからのお話は、西を福井市域（天神山7号墳）、東を富山県氷見市域（イヨダノヤマ3号墳・加納南9号墳）ないしは小矢部市域（谷内21号墳）までの領域を対象にします。この設定は、帯金式甲冑の分布にみられる、日本海側から北上した百舌鳥・古市古墳群の勢力の直接的な影響がおよぶ北辺地域として一定のまとまりをもっているとの理解によります。

北陸地方では、福井県嶺南地域で3例の甲冑出土古墳（向出山1号墳・向山1号墳・西塚古墳）が、また新潟県でも2例の甲冑出土古墳（南魚沼市飯綱山第10号墳・新潟市牡丹山諏訪神社古墳）が知られています。ここでは、前者は福井平野以北とは異なる領域であること、後者は東山道を経由して北関東地方から波及してきたものと考えて今回の検討から切り離します。よって、以下でいう北陸地方は、上記の領域を対象とします。

① 三角縁神獣鏡と方形板革綴短甲

中期の甲冑についてお話しする前に、まずそれ以前の北陸地方の諸勢力と畿内政権との関係についてみておきたいと思います。

北陸地方の古墳時代研究は、これまでに多くの研究者によって大きな成果がもたらされてきました。その成果は、たとえば図12に示した古墳編年などに結実しています。ここでは、これらの研究成果を踏まえ、限られた事例ですが、前期前半から半ばの三角縁神獣鏡と前期後半の方形板革綴短甲に注目してみたいと思います。これは、中期の帯金式甲冑が百舌鳥・古市古墳群の勢力によって供給されたと同様に、三角縁神獣鏡は大和盆地東南部地域の勢力から、方形板革綴短甲は佐紀古墳群の勢力から供与された副葬品であることから、当該期の政権勢力と北陸地方の勢力との政治的距離を測るうえできわめて有効な指標になると考えてのことです。

北陸地方では、現在のところ、三角縁神獣鏡は福井市花野谷1号墳（天王・日月・獣文帯四神四獣鏡）と同足羽山山頂付近（吾作三神五獣鏡？・破片）、中能登町小田中親王塚古墳（波

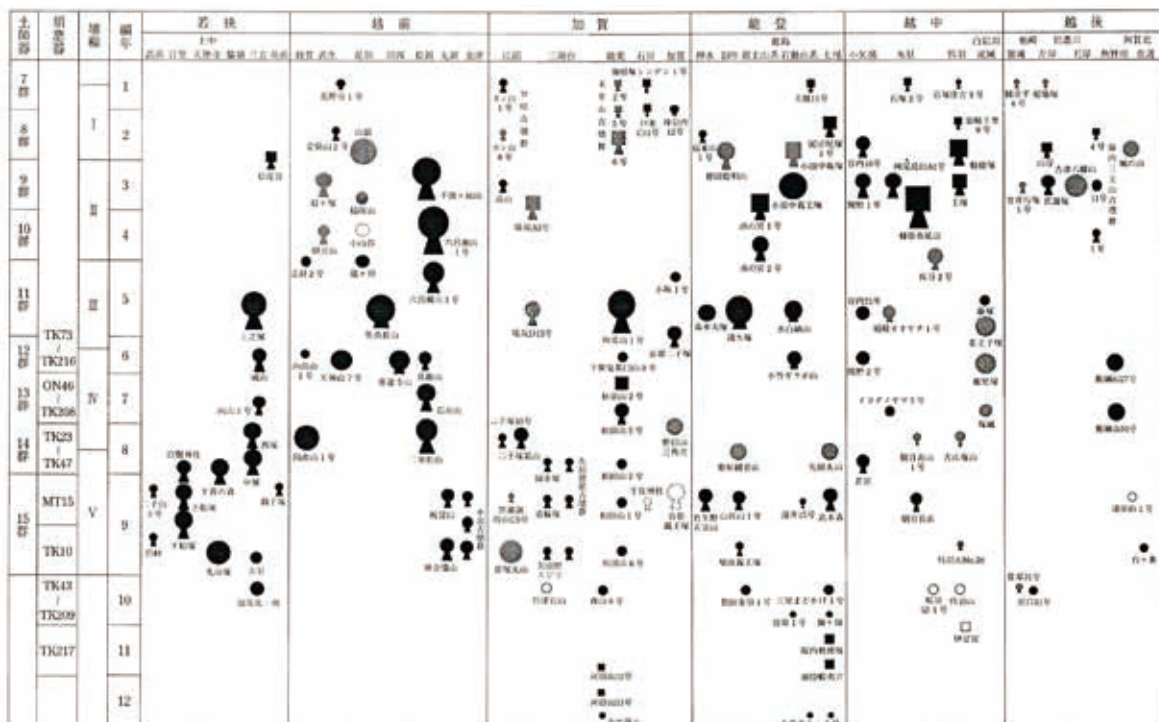


図12 北陸地方主要古墳編年図



図 13 小田中親王塚古墳出土三角縁神獣鏡



図 14 雨の宮 1 号墳出土方形板革綴短甲

もんたいさんしんさんじゆうきょう ぼうせい
 文帯三神三獣鏡・仿製獣文帯三神三獣鏡)で出土しています。ちなみに、三角縁神獣鏡の出土は、日本海側では富山県以北では知られていません。このうち、花野谷 1 号墳と足羽山山頂付近で出土した三角縁神獣鏡はきわめて古いもので、前期前半の鏡です。一方の小田中親王塚古墳から出土した三角縁神獣鏡は、前期半ばの鏡です。花野谷 1 号墳は福井平野に西から入る位置に、足羽山山頂付近はその北方に、小田中親王塚古墳は邑知低地帯おうちの南側ほぼ中央にあり、三角縁神獣鏡を介した大和盆地東南部地域の勢力の影響が段階的に北上していったことが考えられます。

一方、方形板革綴短甲が出土した中能登町雨の宮 1 号墳は、小田中親王塚古墳と邑知低地帯を隔てて北側にほぼ対面するように位置しています。上述したように、方形板革綴短甲は、日本列島では 20 の出土例しか知られていません。畿内以東では、雨の宮 1 号墳を除くと、茨城県で 1 (狐塚古墳きつねづか)、岐阜県で 1 (船来山 98 号墳ふなきやま) が知られるのみで、きわめて限られています。

三角縁神獣鏡と方形板革綴短甲だけを手がかりにするわけではありませんし、今後新たな事例が知られるようになるかもしれませんが、少なくとも北陸地方には、大和盆地東南部地域の勢力と、これに続く佐紀古墳群の勢力という政権勢力と強く結びつく地域勢力がすでに存在していたことがわかります。また、その影響は日本海側を北上して進んだようです。ただし、現在知られている分布密度は、上記のようにきわめて希薄なもので、三角縁神獣鏡と方形板革綴短甲だけからみれば、後述する百舌鳥・古市古墳群の勢力との関係に比べ限られたものであったことが考えられます。

② 北陸地方への帯金式甲冑の拡散

北陸地方でみられる甲冑の拡散についても、多くの研究者によって注目されてきました。これらの研究では、永平寺町二本松山古墳にほんまつやまや加賀市二子塚ふたごづか 狐山古墳かむりなどでみられる冠かんむりや帯金具おびかなぐ、また垂飾付耳飾りすいしよくといった朝鮮半島系の副葬品の出土から、畿内政権による半島政策に深く関与していたとする考えが示されています。今回は、これらの研究に加え、これまで取り上げられることがなかった、武器の副葬が顕著に認められる新興中規模勢力と、その中でみられる少量の農工器具が組み込まれた武器組成をもつ古墳の出現に注目して考えてみようと思います。

さて、北陸地方での甲冑出土古墳をみると、中期前半の甲冑をもつ羽咋市柴垣円山 1 号墳しばがきまるやまや小矢部市谷内 21 号墳の存在から、中期前半以降、百舌鳥・古市古墳群の勢力の影響が南から段階的に進んでいくのではなく、一気にその北辺となる地域まで及んだことがわかります。さらに、これらの地域には、中期後半の氷見市イヨダノヤマ 3 号墳や同加納南 9 号墳が存在する

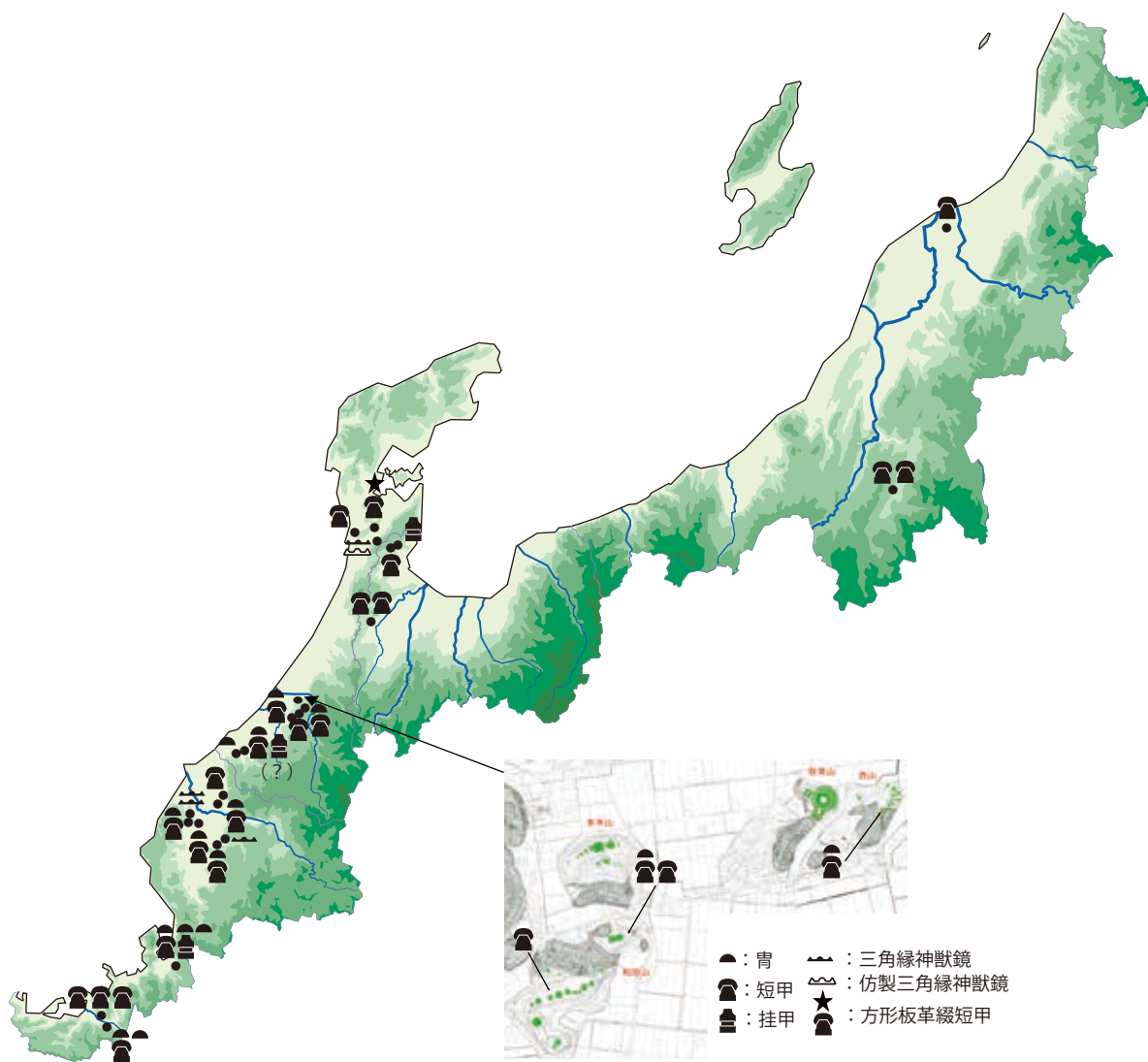


図 15 北陸地方帯金式甲冑出土古墳分布図（三角縁神獸鏡・方形板革綴短甲含む）

ことから、その関係が継続していたと考えられます。

また、加賀地域では、たとえば中期前半ないしは半ばに能美市下開発茶白山^{しもかいはつちやうすやま} 9号墳が出現し、さらに同和田山古墳群^{わだやま} 2・5号墳などと、中期後半にいたるまで甲冑の供給が継続しています。さらに、中期後半には、その南に位置する加賀市二子塚狐山古墳^{すいさかまるやま} や同吸坂丸山5号墳でも甲冑の出土がみられるようになり、甲冑を受容する拠点的な地域：勢力が形成され、百舌鳥・古市古墳群の勢力の影響がより広く、より深く浸透していった状況がみてとれます。とくに、これらの甲冑出土古墳は、傑出した規模をもつ古墳ではありませんが、地域首長墳とともに小規模古墳がその対象になっていることが注目されます。

一方、福井平野では舟形石棺をもつ永平寺町石舟山古墳^{ふながたせつかん}（前方後円墳：79[㍿]）や同二本松山古墳^{いしふねやま}（前方後円墳：89[㍿]）といった有力首長墳とともに、福井市饅頭山^{まんじゅうやま} 1号墳や同西谷山^{にしたにやま} 2号墳のような中小規模古墳でも甲冑が出土しており、これらと異なった様相がみられることは重要です。

以上のことに「最新の武器には、自由な流通はない」という法則を適用して、甲冑の移動によってわかる勢力間の関係について考えてみたいと思います。最新の武器である甲冑の供給を受けることができた地域勢力は、その製造、供給を担う百舌鳥・古市古墳群の勢力と、政治や軍事の面で利害を共有するきわめて密接な関係にあったことが考えられます。これらの地域勢力は、両古

墳群の勢力との直接的な関係を背景に、それぞれの地域において優位な立場を占めるようになったことでしょう。しかしその一方で、軍事という面を含め、両古墳群の勢力から強い制約を受けることとなります。

また、このような関係は、百舌鳥・古市古墳群の勢力側からの一方的な見方だけでは十分ではありません。たとえば、当時の社会がもっとも強く求めていた「鉄」です。当時の日本列島は、これを朝鮮半島に全面的に依存しており、その輸入ルートを握っていたのが両古墳群の勢力です。各地域勢力にとって鉄の入手は喫緊の課題であり、両古墳群の勢力との太いパイプはどうしてもつなぎ止めておかなければならないものでもありました。地方勢力側のしたたかな計算も見え隠れします。

③ 格差をもつふたつの埋葬施設

では、南加賀地域を中心とした北陸地方で出土する帯金式甲冑によって、なにがわかるのでしょうか。

まず、中期以降に大きな影響力をもつようになる和田山古墳群について、とくに5号墳を中心に見てみたいと思います。5号墳は、全長約55㍍の中規模の前方後円墳で、ともに甲冑を含む重厚な武器を中心とした副葬品をもつ、ふたつの埋葬施設が存在していました。表3に示したように、ふたつの埋葬施設間には、A槨の内容がB槨にまさるという格差がみて取れます。和田山古墳群では、このような格差のあるふたつの埋葬施設をもつ古墳の築造は継続しませんが、5号墳の内容は、上述した桜塚古墳群東群や、熊谷氏が取り上げた埼玉稲荷山古墳などにつうじるものがあると考えています。

牽強付会とのそしりを受けるかもしれませんが、主たる埋葬施設（A槨）に葬られた人物が中期半ばの地域首長であり、他方の埋葬施設（B槨）に葬られた人物が百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとに、武人として配下の人びとを伴って上番した人物では、と考えたいのです。また、中期後半に入りますが、和田山古墳群2号墳（円墳：20㍍）の被葬者や、和田山古墳群の北側に位置する西山古墳群3号墳（円墳：22㍍）の被葬者がともに上番したことによって、その際に百舌鳥・古市古墳群の勢力から甲冑を与えられた可能性を考えたいと思っています。

ところで、中期に入ると和田山5号墳のような古墳は、北陸地方だけでなく、全国各地でみることができます。このような現象は、当時の百舌鳥・古市古墳群の勢力が、上述した畿内およびその周辺地域だけではなく、各地の地域首長を介して武装人員の動員を可能とするシステムを確立していたことを示しているのでは、と想像をたくましくしています。

④ 農工具が組み込まれた武器組成をもつ小規模古墳

つぎに、後出古墳群を取り上げて示した、移動や駐留に対応するために少量の農工具が組み込まれた、あるいはその可能性が考えられる武器組成をもつ古墳についてみたいと思います。現在のところ、加納南9号墳・イヨダノヤマ3号墳・小松市八里向山F遺跡7号墳第1主体部・

表3 和田山古墳群5号墳出土遺物一覧

	A槨	B槨
粘土槨	約6.5×0.8 <small>㍍</small>	約4.2×0.7 <small>㍍</small>
鏡	画文帯神獸鏡1	珠文鏡2・線文鏡1
玉	金銅装空玉12+	
鈴	金銅装3・青銅製12+	
槨	6	4
冑	豎矧細板鋌留 衝角付冑	
短甲	三角板鋌留短甲	三角板鋌留短甲
頸甲	1	
肩甲	1	
籠手	1	
小札	手甲	
劍	2	14
刀	5	4
ヤリ	5	4
鉾	2	2
石突		1
鉄鏃		233+
斧	3	3
U字形刃先	2	1
鎌		1
刀子	2	2
その他	中国銭貨4	鉄板2

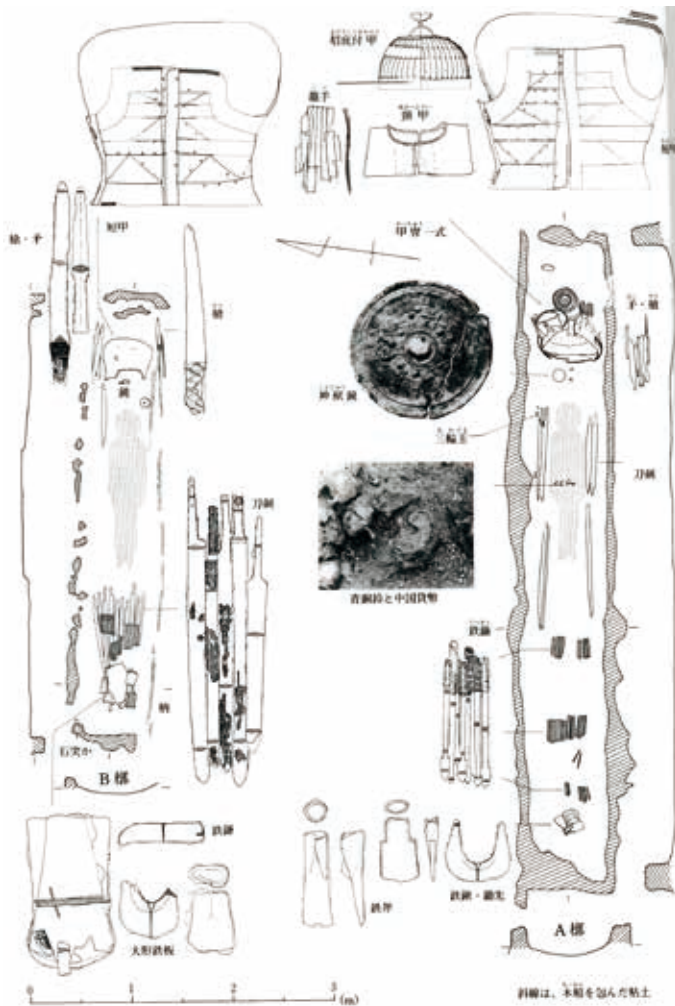


図 15 和田山古墳群 5 号墳遺物出土状況および出土遺物（武器・農工具）

和田山 2 号墳・吸坂丸山 5 号墳・福井市法土寺 22 号墳（甲冑の付属具のみ）がこれに当たると考えています。これら 6 古墳は、規模が不明の八里向山 F 遺跡 7 号墳第 1 主体部を除くと、最大が長径 25 ㍍・短径 21 ㍍の円墳：イヨダノヤマ 3 号墳、最小が径 15 ㍍の円墳：吸坂丸山 5 号墳で、いずれも中期後半に築造された木棺直葬を埋葬施設とする小規模古墳です。

それぞれの出土状況をみると、たとえば、八里向山 F 遺跡 7 号墳第 1 主体部では、主体部北側西辺で刀 1、同東辺で剣 1 と刀子 1、主体部南側小口付近で鉄鏃 34 とともに、鎌 1・斧大小各 1・U 字形刃先 1・鉤 1・鑿 1 を内部におさめた横矧板 鍔留短甲 1 が出土しています。また、和田山 2 号墳では、主体部西側小口部分に置かれた短甲内から斧 1・砥石 1 が馬具一式・銚 1・管玉 1 とともに、加納南 9 号墳では、主体部西側に置かれた挂甲の内部から銚 1 と斧 1 が出土しています。

これらの古墳でみられる武器は、法土寺 22 号墳を除いて、いずれも甲冑を中心にした刀剣・鉄鏃で構成され、これに少量の農工具が伴っています。農工具は、種類や数量に違いがみられ、また短甲あるいは挂甲内に納められた状態で出土したものとそうでないものもあり、すべてを農工具が組み込まれた武器組成としてみることに異論が出るかもしれませんが、各種生産への関与を象徴する農工具として副葬された可能性は低いものと判断しています。日本海側から北上する北辺の地域：北陸地方に、とくに中期後半に農工具が組み込まれた武器組成をもつ小規模古墳が複数存在することは、きわめて重要な現象であると考えています。これは、前章で取り上げた、中期半ばないしは後半の畿内およびその周辺地域でみられた一部の初期群集墳につうじるもの

であり、甲冑を中心にした武器の副葬が卓越する、新興中規模古墳群の勢力の上番によって生まれたものであると考えています。

上述したように、少量の農工具を短甲内におさめた状態で出土する事例は、畿内およびその周辺地域や北陸地方だけに限られたものではなく、たとえば福岡県柿原古墳群 I 地区 C -14 号墓のように北部九州地域の古墳でもみられます。また、短甲内におさめられているという条件を除けば、少量の農工具が甲冑を含む組成として整った武器とともに出土する事例は、中期後半の日本列島各地で数多くみられるものです。

ここでは、中期半ばから後半の畿内およびその周辺地域で生

じた変化、すなわち、軍事構成員としての役割を担うために生まれてきた古墳被葬者が、同時期の北陸地方においても同様に認められるという点に注目したいと思います。すでに、有力首長層の存在が目立つ若狭地域や福井平野とは好対照をなしているとの指摘もありますが、このような現象に対する検討を加えることによって、より具体的な姿を描き出すことができるものと考えます。すなわち、百舌鳥・古市古墳群の勢力の影響が日本海側から北上する北辺の地域：北陸地方にも移動や駐留を伴う軍事活動に対応できる、つまりこれに加わった勢力が存在していたことを示していると考えます。百舌鳥・古市古墳群の勢力のねらいは、実動部隊の中核となる中小規模勢力の直接掌握にあったと考えられます。

5. 日本列島を取り巻く東アジア情勢と侵略を目的とした軍事組織の編制

ここであらためて、「軍事活動によって解決されなければならない課題によって、軍事組織の形が決定される」という法則に注目したいと思います。百舌鳥・古市古墳群の勢力が形状、機能が統一された帯金式甲冑を、なぜ北陸地方を含む日本列島各地の勢力に供給するようになったのかをこの法則を使って説明し、今回のお話を締めくくりたいと思います。

ところで、古墳時代中期の列島がもつ軍事的特徴として、つぎのふたつのことがあげられます。ひとつは、畿内政権の中核を占めた百舌鳥・古市古墳群の勢力が、大きなリスクをとともうにもかかわらず最新の機能を備えた甲冑を、北陸地方をはじめ各地域の勢力に供給したことです。もうひとつは、堅牢な防御施設を備えた城塞や領域境界線上に防衛ラインとなるような軍事施設が、当時の列島でみられないことです。

まず、統一された武器での武装は、軍事組織を編制する上で重要な要件のひとつですが、とりわけ攻撃を主体とする軍事組織で強く求められることです。つぎに、防御施設や境界線上に防衛

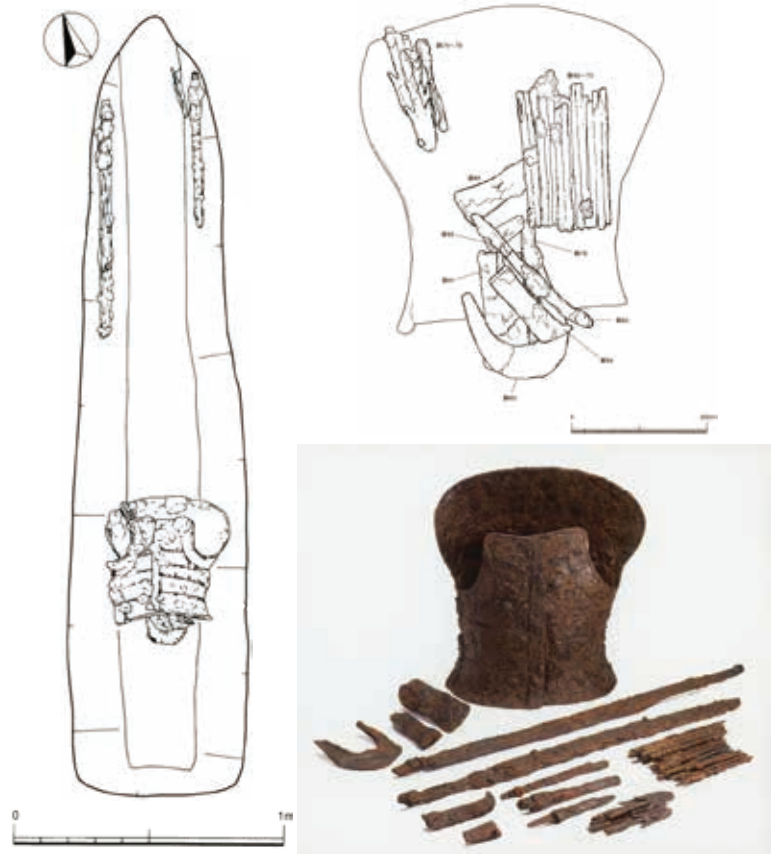


図 16 八里向山 F 遺跡 7 号墳第 1 主体部遺物出土状況及び出土遺物

ラインがみられないことは、列島内の諸勢力間に深刻な軍事的対峙がなかったことを示しています。ということは、このような軍事的特徴は、列島内での軍事的課題によってではなく、列島外の軍事的課題によって生じたこととなります。つまり、甲冑の供給は、朝鮮半島を対象とした計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動に必要な軍事的動員を可能にする条件を整えるために行われたと考えられるのです。

4世紀に入り、中国西晋の滅亡は、東アジア世界に大きな混乱と高い社会的緊張をもたらし、同時に周辺の諸民族に古代国家形成への足がかりを与えることになりました。369年、半島では、高句麗と百済との間で高まっていた緊張が軍事的衝突に発展します。このことを予測していたかのように、4世紀半ばまでには、半島東南部地域の韓国金海市大成洞古墳群や同釜山市福泉洞古墳群では甲冑や馬具を中心にした組成として整った武器の副葬がはじまっています。

前期後半、筒形銅器などの分布から導き出される、佐紀古墳群の勢力と半島東南部地域の勢力との間に成立した関係は、方形板革綴短甲を中心にした武器の副葬となって現出し、中期には百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、半島を対象にした計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動が展開されたと考えます。両古墳群の勢力は、高句麗と百済の軍事的対峙という深刻な情勢につけ込み、半島に対する発言力の強化やさまざまな利権の獲得をねらった、高度な政治的判断にもとづいた、したたかで強引な外交を展開していたのではと想像しています。両古墳群の勢力の真のねらいは、半島問題というきわめて高度な外交課題への対応を保障する、大規模な軍事組織の編制と運用にあったのだと考えます。今回対象とした北陸地方の諸勢力が、列島各地の勢力とともに、百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、直接、間接的にこの軍事活動に参画することになったことによってこのような現象が現れたと考えます。

おわりに

今回取り上げました帯金式甲冑は、平安時代に出現する大鎧のような華麗さも、戦国時代の当世具足のようなきらびやかさも、黒漆を塗って仕上げただけの質実な甲冑です。私は、少し大げさな表現ですが、このような甲冑で武装した軍事的集団を「漆黒の軍団」とよんでいます。ただ、すべての甲冑が黒漆を塗って仕上げられたわけではありませんが、北陸地方ではとくに顕著にみられるものです。

このような軍事的集団の存在を背景に、百舌鳥・古市古墳群の勢力によって主導された対外的な軍事活動は、畿内政権の求心力を急速に高めるとともに、古代国家の形成を強く押し進めることになったでしょう。ところが、6世紀を前後するころに台頭した男大迹大王の勢力との間で畿内政権の主導権の交替がおり、これによって甲冑の供給を介在させた軍事システムも崩壊したと考えています。しかし、男大迹大王の擁立に中心的な役割を果たした諸勢力は、北陸地方の勢力も含め、たとえば小松市三湖台古墳群の矢田野エジリ古墳のように、それまでもまして大きな存在感をもって、ふたたび新たな歴史の舞台に登場することになるのです。

なお、小文を作成するにあたり、小松市埋蔵文化財センターのみなさまから多大なご支援、ご教示を頂戴しましたことを申し添え、感謝の意を表します。

参考・引用文献

- S. アンジェイエフスキー（坂井達朗訳）2004『軍事組織と社会』新曜社
- 伊藤雅文 2008『古墳時代の王権と地域社会』学生社
- 入江文敏 2011『若狭・越古墳時代の研究』学生社
- 内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号
- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 北野耕平 1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第54巻第4号
- 北野耕平 1976『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室
- 熊谷公男 2000『大王から天皇へ』講談社
- C. コーリー（神川信彦・池田清訳）1961『軍隊と革命の技術』岩波書店
- 阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社
- 下向井龍彦 1987「日本律令軍制の基本構造」『史学研究』144号
- 白石太一郎 2005『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 菅原雄一 2013「中期」『若狭と越の古墳時代』『季刊考古学』別冊19 雄山閣
- 鈴木一有 2004「北陸における甲冑出土古墳の様相」『下関発茶白山古墳群Ⅱ』辰口町教育委員会
- 関川尚功 1987「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』上
- 高橋克壽 2015「若狭地域の前方後円墳の動態」『若狭向山1号墳』若狭町
- 高橋浩二 2011「古墳文化の地域的諸相：北陸」『日本の考古学講座 古墳時代（上）』青木書店
- 田中晋作 2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社
- 田中晋作 2003「古墳に副葬された武器組成の変化について」『日本考古学』第15号
- 田中晋作 2004「大阪府榎塚古墳群東群の被葬者集団がもった軍事的特質について」『地域と古文化』
- 田中晋作 2009『筒形銅器と政権交替』学生社
- 田中晋作 2011「古墳時代における武器組成の変化について（4）—畿内における古墳時代前期後半の様相（Ⅱ）—」
『勝部明生先生古稀記念論文集』
- 田中晋作 2013「4 社会 ②軍事組織」『古墳時代の考古学』同成社
- 田中晋作 2016『古市古墳群の解明へ 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』新泉社
- 田中晋作 2017「古墳時代中期の鏝について—百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとに編制された軍事組織の特質—」
『古代学研究』第214号
- 田中晋作 2018「今城塚古墳と新興中小規模古墳の動静」『橿原考古学研究所論集』17号 八木書店
- 豊島直博 2000「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」『考古学雑誌』第85巻2号
- 西川宏 1966「武器」『日本の考古学 古墳時代（下）』河出書房
- 西川麻野 2007「甲冑副葬古墳の出現背景」『富山考古学研究』第10号（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 橋本達也 2021「古墳時代における甲冑副葬の意義」『古墳文化基礎論集』
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 藤田和尊 2006『古墳時代の王権と軍事』学生社
- 森田克行 2006：『今城塚と三島古墳群』『日本の遺跡』7 同成社
- 山尾幸久 2003『古代の日朝関係』塙書房 他

挿図表出典

図 4 復元帯金式甲冑：関西大学博物館

図 5 復元帯金式甲冑模式図：古谷毅 1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第 81 巻第 4 号

図 7 百舌鳥古墳群：十河良和 2008「古市・百舌鳥古墳群の形成過程（2）百舌鳥古墳」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』より

図 8 古市古墳群：一瀬和夫氏提供（一部改変）

図 9 桜塚古墳群東群分布図：豊中市 2005『新修豊中市史』第 4 巻より（一部改変）

図 10 御獅子塚古墳埋葬施設実測図：豊中市 2005『新修豊中市史』第 4 巻より

図 11 後出古墳群 2 号墳遺物出土状況および短甲内遺物：報告書より

図 12 北陸地方主要古墳編年図：高橋浩二 2011 より

図 13 小田中親王塚古墳出土三角縁神獣鏡：石川県立歴史博物館 2016『加賀・能登 王墓の世界』より

図 14 雨の宮 1 号墳出土方形板革綴短甲（復元品）：中能登町・筆者撮影

図 15 北陸地方帯金式甲冑出土古墳分布図：北陸地形ベクトル分布図用 小松市埋蔵文化財センター提供
和田山古墳群等分布図：国史跡 能美古墳群案内リーフレットより

図 16 和田山古墳群 5 号墳遺物出土状況及び出土遺物：報告書より・写真提供 能美ふるさとミュージアム

図 17 八里向山 F 遺跡 7 号墳第 1 主体部遺物出土状況及び出土遺物：報告書より・写真提供 小松市埋蔵文化財センター

表 1 北野耕平 1976『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室より

小松・能美地域の甲冑

小松・能美地域で甲冑が副葬された古墳は、計6基（下の写真+能美市和田山2号墳・同市西山3号墳）あります。点数は冑4点・短甲7点に達し、武器や農工具も多数出土しています。



小松市埴田後山無常堂古墳出土品



小松市八里向山F7号墳出土品



能美市下開発茶白山9号墳出土品【能美ふるさとミュージアム提供】



能美市和田山5号墳出土品【能美ふるさとミュージアム提供】

加賀立国 1200年プレ企画 特別講演会 武器から探る南加賀の古墳時代

発行日 令和4年9月1日

発行 小松市埋蔵文化財センター

編集 小松市埋蔵文化財センター

〒923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL 0761-47-5713